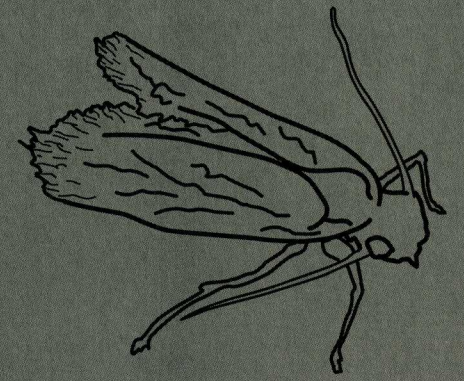


生きもの
博物誌
【イガ、コイガ】



博物館の
いたずら虫たち③

橋本 沙知
(はしもと さち)

(財)元興寺文化財研究所研究補佐員

衣類を食べる虫

チョウ目は、いわゆるチョウやガの仲間からなる大きなグループで、世界では一五万種以上がみとめられている。ガの仲間のイガ類は、その名のとおり「衣類を食害するガ」であり、イガとコイガの二種が特に知られている。イガ、コイガの幼虫は、タンパク質の一種であるケラチンを消化できる。このため、毛織物や絹織物、皮革、羽毛などを好んで食す。汗や食べこぼしがついている場合には、化学繊維や植物繊維でも食害する。幼虫、成虫ともに、暗いところを好む。また一年中発生するため、衣類ケースのなかに幼虫が侵入していた場合、気づいたころには大きな穴が開いていることになる。家庭では、タンスや衣類ケ

展示場や収蔵庫にも

博物館でも、イガ、コイガは、資料を食害し、フンや吐糸で資料を汚す害虫として注意されている(写真1)。民博での被害の一例としては、中央・北アジア展示場の移動式住居カザフの天幕(写真2)があげられる。天幕は、木製の骨組みにフェルトをかぶせた仕組みになっている。このフェルトを始め、天幕内部の絨毯や帯飾り等の材料のほとんどが羊毛製である。そのため、一年をとおして安定した環境が維持されている展示場におい

ース内に衣類用防虫剤等をいれる対策が一般的であるように、わたしたちの日常生活において身近な害虫である。

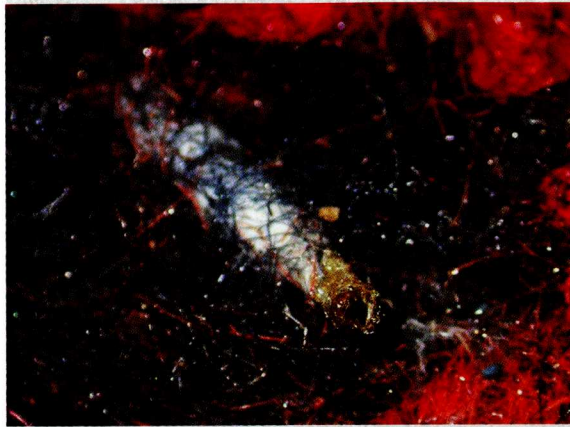
て、天幕はイガ類のかっこうの標的となったのである。これらの虫害が確認された資料は展示場から撤去し、二酸化炭素処理による殺虫処理をおこなった。また、簡単には撤去できない骨組みの結束縄は、その場で市販のカイロを用いて高温処理をおこなった。

収蔵庫においてもイガ、コイガの被害にあいやすい資料がある。絨毯資料は、空調が二四時間制御されている特別収蔵庫に配架されている。しかし、近年、絨毯収蔵庫内でイガ、コイガの古くなった死骸がたて続けに発見されたため、二〇〇八年、収蔵庫改善計画の一環として、絨毯資料約四九〇点の保管方法の見直しと、配架替えを実施することとなった。絨毯収蔵庫改善計画の流れは、資料の取り出し、資料点検、虫害クリーニング作業、写真撮影、絨毯巻き取り作業、殺虫処理、再配架である(写真3)。

殺虫処理については、資料点数が多いことから、大型バッグを用いた二酸化炭素処理と、二〇〇七年三月に新設したウォークイン高低温処理庫での低温処理を並行してすすめることとした。高低温処理庫の本格的な使用に際しては、これまでにおこなってきた業務用フリーザー(写真4)を用いた予備実験の結果を踏まえて試運転を重ね、イガやコイガを殺虫するために必要な温度環境と処理時間を維持できるかどうか試みた。その結果、八日間で、小型絨毯五〇点を一度に処理できることがわかった(写真5)。このような温度処理は、薬剤を使わないため、資料にも、環境にも、作業者にも優しいのが特長である。

このように、民博では高低温処理庫の新設によって、さらに殺虫処理の幅が広がった。しかし、イガやコイガだけでなく、虫害を避けるためには、毎朝の展示場点検や定期的な収蔵庫清掃といった、日ごろの地道な努力が何よりも大切なのである。

(写真1)動物性繊維に作られた筒型の巣



(写真2)中央・北アジア展示場のカザフの天幕

(写真3)絨毯資料のクリーニング作業



(写真5)低温処理のためウォークイン高低温処理庫におさめた絨毯資料



(写真4)低温処理予備実験に用いた業務用フリーザー

チョウ目 (学名: Lepidoptera) ヒロズコガ科 (学名: Tineidae)

イガ (学名: Tinea translucens Meyrick)

コイガ (学名: Tineola bisselliella (Hummel))

イガの成虫は灰褐色で体長4~7mmである。翅に3つの黒い斑をもつ。英名で Casemaking clothes moth というように、幼虫期に動物性繊維を食害し、食べた繊維を使って筒型の巣を作るのが特徴である。巣の両端は開いていて、そこから身を乗り出し、移動、食害する。巣は、幼虫が食べた繊維の色をしている。羽化した成虫は食害せずに交尾・産卵する。コイガは名前とは逆にイガよりやや大きく、成虫の体長6~8mmで、淡黄灰色である。2種を見わけるのは難しいが、コイガには黒い斑はない。イガと同じく幼虫期のみ食害する。ともに、25~30℃程度の高温での食害が大きく、日本全土、世界各地に分布する。



イガの成虫 (提供: 富岡康浩)